日本と台湾の架け橋「李登輝物語」

第三回

講談師　一龍斎貞花

落とした財布が戻るのは日本と台湾だけといわれています。台北駅で財布を拾った青年が、「オーイ、財布落としたよー」と、追い駆けて行く姿を私見ています。温かい心があるんだと嬉しい思いをしました。

台北市長から、台湾省主席に任命された李登輝に悲しい運命が・・・・。

新聞記者で日本語が堪能な長男憲文を信頼し、台湾社会の動向について話し合う憲文が、癌のため31歳の若さで死去。

自らなきがらに服を着せて棺桶に入れて葬儀にのぞみ、荼毘にふす時、

「ストレッチャーに乗せるわけにはいかん」

憲文を抱きかかえて霊安室まで運び、家族をはじめ参列した人たちは、涙で手を合わせ、我が子をいかに愛していたかを改めて覚ったのでした。

２００６年、ＮＨＫ紅白歌合戦をテレビで見ていた李夫妻は、秋川雅史の歌う「千の風になって」を聴いて感激。

「私のお墓の前で泣かないで下さい」

「千の風になって、あの大きな空を吹き渡っていきます」

李夫妻は、「千の風になって」を歌い、奥さんの曽文恵夫人は、

「あの歌を聴いて、やっと考え方を変えることが出来ました」

と、我が子の死を25年たって吹っ切ることが出来たのでした。

李登輝さんは亡くなるまで、「千の風になって」を愛唱し、葬儀の時にもこの歌が流れていました。

李登輝、総統に就任

蒋経国は、38年間という世界最長の戒厳令を解除。この間死刑８０９人、逮捕者1万6千人と国防省の報告だが、関与した治安機関があり14万人が不当に逮捕され、4千人が処刑されたとの推計もある。

日本の近代史では、日清・日露戦争、関東大震災、二・二六事件等の際戒厳令が発動されている。

蒋経国総統は、野心を持たない誠実な李登輝を副総統に任命。

登輝は、16年間経国に仕え、経国が糖尿病で亡くなるや、憲法に従って副総統の李登輝が総統に就任。

登輝は、「解除は当り前で遅いくらいだ。余りにも長すぎた戒厳令の解除で、民主化が出来るようになった」

と、語っている。

独裁政権に強いわだかまりを持っていた年配の台湾人から、

「絶対に許しがたい国民党の総統になるとは何事だ」

と、詰問されるや、

「台湾中部の彰化（しょうか）で水害が起きた時、蒋経国は、自ら泥水に足を踏み入れ被害状況を確かめたのです。パフォーマンスでないことを実際に見ました。蒋介石は、自ら泥水に入ったりしませんでした」

東日本大震災の時、長靴を持参せず水たまりを背負われた、日本の当時の担

当大臣とはえらい違いです。

側近が経国に、

「日本人が、こうこう中国人の悪口を言っています」

「そうか、中国人にそんな悪いところがあれば、それを直せばよいではないか」

またある時は、

「私は台湾に住んで40年、すでに台湾人ですよ」

登輝はこうした柔軟な考えを持つ経国から学んだのでございました。

経国は、ワンマンの父蔣介石と対立し、謹慎させられたこともあり、民主化を考えている人でした。

かつて私は、経国は蔣介石の息子だから、その跡を継いだんだと思っていましたが、蔣経国という人物を勘違いしていました。

李は総統になったものの権力も無く、経国という後ろ盾を失い、追い落としを狙う勢力に囲まれ、薄氷を踏むスタートでありました。

学生たちが、民主化を求め市民に呼び掛け、蔣介石を顕彰する中正記念堂に集った学生や市民は数日のうちに数万人にふくれ上がった。

この時登輝は、

「警察隊は、デモ学生らに対し、絶対に危害を加えてはいけない」

と、厳命。

武力弾圧によって多数の死者を出した台湾の二二八事件。１９８９年６月、死者３１９人という発表も、実際はもっと多い数千人とも1万人ともいわれる中国天安門の抗議。戦車で轢き殺す映像が、しばしば流されています。

１９８０年5月、民主化デモを弾圧、市民２００人が殺害された韓国光州事件とは違う人道的対応でした。

台湾の靖国神社ともいわれる中正記念堂の衛兵交代式は、忠烈祠と共に台湾の名物でご覧になった方もいらっしゃると思います。

学生の間に政治改革の期待が広まっていき、李の呼び掛けに学生代表53人が総統府において会談。

一週間近く、雨の日も座り込みを続けハンガーストライキをした学生もおり、

「身体は、大丈夫ですか」

と、健康状態を心配し代表の要求を聞き、民意を汲み取る国是会議開催を約束。

デモ参加者は、登輝の言葉を信じ静かに解散。

民主化を求める学生の気持ちを汲み取ったことが、過去の強行弾圧との違いによって、若者たちが味方に付いてくれたのです。

後の２０１４年馬英九政権の、中国寄りの政策に反発したヒマワリ運動の時、市民が若者たちに食べ物を差し入れました。

台湾民主化への信念

「ここは忍耐のしどころ」

と、影響力を持つ長老たちに頭を下げ、蔣介石の遺体が安置されている忠烈祠に毎日参拝。

守旧派の中傷、圧力に奥さんは泣きながら、

「お願いですから総統を続けることはやめて下さい」

「経国は、野党の容認や、戒厳令の解除、報道の自由など民主化の基礎を作って亡くなった。

この民主化の流れを止めてはいけない。いくら苦しくとも、台湾の未来を考えればここで投げ出すわけにはいかない。吉田松陰は、

〝かくすればかくなるものと知りながら、やむにやまれぬ大和魂〟

と、歌われた。

ここは、やむにやまれないやろう」

李をひきずり降ろそうとする守旧派も一枚板ではなく、

登輝が、国民党総裁候補に決り、軍のクーデターも暴露され、民衆の応援もあり、国民党の大会で総統に選ばれるや、

「理想とする民主国家を築き上げよう」

政府関係者だけでなく、野党である民進党の政治家や、商工界代表、学識経験者、民間からも幅広く１５０人を集め、台湾史上初めての国是会議を開催。いよいよ民主化へのスタートのお話しは次回連続に申し上げます。